

冠着ヒメボタルの生態明らかに



明徳寺で

信州大学の藤山静雄教授が講演
「ゆたかな生物環境の証し」

冠着山頂に鎮座する冠着神社のお祭りが営まれる毎年7月下旬、神社周辺にホタルが舞うことがわかりました。絶滅危惧種のヒメボタルです(シリーズ97号)。川がないのになぜ? などと疑問を抱いていた更級人「風月の会」では、生態学がご専門でホタルに詳しい信州大学理学部の藤山静雄教授を7月20日、明徳寺にお招きし講演をお願いしました。

藤山先生は写真と図解をスライド上映し、大変わかりやすく話してくださいました。左がヒメボタルの写真です。特徴は大きな目玉。目玉が大きいのは少ない光でも活動できるようするための工夫です。以外だったのは、日本にいる46種のうち、川に生息するのはゲンジボタルやヘイケボタルなど3種だけで、大変例外的だということでした。ではヒメボタルはどのように生まれて成長するのか、その図解が下です。林床の落ち葉の中などに卵を産みます。8月に孵化し、そのあとは陸生巻貝や小動物を食えます。幼虫は土の中でまゆをつくり、さなぎになり7月、土から出ます。

かつては、このような自然環境の山はたくさんあったのですが、杉などの人工林が多くなり、林床が荒れ、なかなか見えなくなってきたのだそうです。逆に言うと、冠着山頂は多様な生物が生きられる豊かな自然環境ということになります。藤山先生も幾度か更級人「風月の会」のメンバーと冠着山頂でヒメボタルの観察をしたことがあり、登山道沿いに舞うヒメボタルの点滅を見たことがあるそうです。ヒメボタルは頂上周辺ではかなり広範囲で生息しているはずとのことでした。

不思議なことにヒメボタルはメスは羽が退化して飛ばずオスだけが舞います。そんなこともモチーフにした歌「冠着の光」を講演会後、さらしな棚田バンドが披露しました。里側のホタルの発生状況を調べている羽尾4区の小河原邦楽さんは近年は湯沢川沿いが発生が盛んになっていると報告しました。千曲市八幡地区の方が中心の信州さらしな月の里実行委員会のみなさんもオリジナルの歌と踊りを披露してくださいました。藤山先生はホタルが発光する理由などホタルの生態や松本市のホタル保全活動も紹介しました。藤山先生の全講演と小河原さんの報告の録音を、さらしな堂のホームページで聴くことができます。



冠着の光 詞:大谷善邦 曲:森政教

(前奏) G C D7 G

1 年に一度のお祭りが
冠着山の頂上でいとなまれる
この一年里に恵みを 与えてくれたことに感謝
お社(やしろ)をはき清め しめ縄を張りかえる
お神酒(みき)をいただくときは 夕闇に
ヒメボタルが 舞い始める
冠着の光り とわにあれ

2 ヒメボタルは 希少種だ
よくそこの地で 生きのびた
里でっぺんで 舞い続けて くれたことに感謝
里人が明るく 楽しいのはそのおかげ
ギターをかついだ 音楽好きが
一緒に歌い 舞い始める
冠着の光り とわにあれ

3 ヒメボタルの メスたちは
羽が退化して 飛ばないそうだ
草むらを照らして 地面の在りかを 教えてくれることに感謝
オスたちはそのおかげで 舞っていられる
神はなぜかくも男と 女を分けるのか
なぜがあるから 舞いたくなる
冠着の光り とわにあれ

